

【表題】 CALL 自学システムによる英語聴解・読解の指導について【論文】

【著者】 横山 彰三・縄田 義直

【発表】 航空大学校研究報告 R-57

【時期】 2004年12月

【概要】

1-1 研究の背景

本研究は、航空大学校（：以下航大）における英語教育の実践調査報告である。航大は平成13年4月から独立行政法人へと移行し、それに伴い修業年限の短縮とシラバスの大幅な改編が行われた。当然、英語教育も教育時間・スタッフの削減が求められ、選択英語(数学との選択)も設定された。実際、教育時間とスタッフの削減は大きな問題である。詳細は割愛するが、それを乗り切る方策としてCALLシステムが導入されるに至った。

椎名(2001)の指摘では中学、高校、大学のCALL教室の設置数は増加の傾向にあり、中学、高校ではすでに90%以上のコンピューター専用の教室が設置され、ほぼ半数の大学がCALL教室を有しているという。その一方で指導教材として、とりあえずは市販のCD-ROM教材を購入して間に合わせているのが現状であるという。筆者の管見にふれた限りでは、最近ではイントラネットを利用したオンライン型の教材も数種類発売されて、採用する大学も急速に増加している。このタイプの教材が人気を博している大きな理由の一つは、後に触れる通り、教材の内容もさることながら、学習者の成績・学習管理を教師が一元的に行うことができる点にあると思われる。CALLを利用した教育についての研究は、その有効性を支持する結果とともに多数報告されている。宮本(2001)では、実験用教材の開発からその評価までを総合的に分析し、効果的なCALL教育への示唆に富んでいる。理想的には、各大学・学部のレベルや必要性に応じた独自のCALL教材があるに越したことはない。しかしながら樋口(2001)も指摘しているように、完全なCALLのコース教材を自ら開発するとなるとそれだけで莫大な時間と労力がかかる。イントラネット型のCALL教材が大学に広く受け入れられつつあることは、システムばかりが先行してスタッフが不足しているという大学におけるCALL教育の一面を物語っているといえよう。

1-2 研究の目的

当初は教育時間減とスタッフ減を補うという、消極的理由から出発したCALL教育であったが実際の運用を開始してからいくつかの問題が発生した。それは横山(2001)でも指摘した以下の点である。

- 1) 使用する教材では学習履歴が残るが、実際に学習しているかを確認することは出来ない。一部の学生にとってはCALL自学自習が単なる時間消化、義務的な学習になっているケースがある。
- 2) 教材を数回聴く・読むと飽きてしまう。特にリーディング教材でその傾向が顕著である。本教材の学習展開は各学習者の判断と意欲による部分が大きく、全員に共通した容易で、確実な学習方略を提示することが必要で、ある。

3) 上記の2点を含めて、学習者に如何に動機付けを行うか。また達成感を与えることが可能か。

特に航大ではフライト訓練が行われない初期の座学期間に英語教育が集中し、なおかつ新シラバスでは6ヶ月という非常に短期間である。宮崎学科課程の英語の授業は、全80時間を一般航空英語と専門航空英語とに40時間ずつ割り当てるが、パイロットという職業に必要とされる専門的英語力を養成するのが第一義的目標であり、CALL学習において行うような一般的英語力の習得に割く時間は小テストの実施や選択英語の時間などを利用するしか方法がない。加えて、近い将来、操縦士の英語能力に関して技能証明制度が導入され、より専門的航空英語のESP的観点からの学習が航大に求められることから、その基礎力たる一般的英語能力についても、この短期間において能力維持・向上に努めなければならない。

本研究は、短時間の学習期間という限定的なCALL学習環境下でも学習効果を得るための方略

について、

1) 事前・事後テスト

2) 学習履歴

3) 学習者へのアンケート

をもとに考察したものである。